

使うほどに馴染む 見て楽しい 使って嬉しい 木の食器

神饌用具の制作にたずさわって

その荘厳さに人々の注目が集まった、昨年11月の天皇陛下即位に伴う大嘗祭。陛下が神と共に新穀を食する儀式のために、全国から神饌用具が納められました。その中の「匙」と「杓子」を制作したのが長岡さんです。宮内庁から用具一式の制作依頼を受けた長野県上松町の「木下商店製箸所」が、匙を作る職人を全国から探して長岡さんに辿り着いたものでした。「お話を頂いた時は『神事に使う』としか聞かされていなかったもので、のちに大嘗祭と知って驚きました。大変光栄で嬉しかったです」



令和の大嘗祭に納められた神饌用具。左から2つ目の杓子、3つ目の匙が長岡さん作

木材はすべて宮内庁から支給されたものを使い、決められた形状に仕上げるといふ厳格なもの。「材料は必要数分しかなく失敗できません。緊張で手が震えました」そう笑う長岡さんですが、心を込め仕上げた匙と杓子を無事に納めて一安心。

職業がある事を初めて知って『私にはこれだ！』って思っただんです」

木工に目覚め「木製カトラリー」を卒業研究のテーマにするほど、その世界にのめり込みました。木の種類による硬度や水への耐性、口に当たる感触の違い、手触りなど、知れば知るほど奥深く楽しかったと振り返ります。

「お皿やフォークも扱ったつもりで研究を始めたのですが、スプーンが奥深すぎてその研究だけで終わってしまいました」

「スプーン」の屋号が表すとおり、長岡さんの代表品は木のスプーン。アカデミー時代から数え、13年に亘り作り続けてきたそのスプーンは、一般的な木製スプーンよりも滑らかで繊細な曲線と、ぶつくりと立体的な柄が特徴的。一目で「スプーン」のブランドだと分かって貰えるといいます。



天然木ならではの色合い、風合いの違いが楽しめる。

「目指しているのは、誰もが使いやすいスプーン。この持ち手は小さな子にも握りやすく、力の弱い高齢者にも負担が少ない。老若男女に合うよう作っています」

クラフトイベントを中心に販売を重ね、そのフォルムと使いやすさにファンが着々と増えています。地方のイベントで購入された方が、1年後に同じ会場で「去年買ったスプーンがとても気に入って、また会えるのを待っています」と追加で購入して下さったという嬉しいエピソードも。



朴の木(ほおのき)で作られたお皿。天然のグラデーションカラーが長岡さんのお気に入り。

「木の食器は古来日本人に親しまれてきました。陶磁器や金属とは違い、熱いものを熱いままに、冷たいものは冷たくなり過ぎないようにしてくれて、食

国土の66%を森林が占める「森の国」日本。その中で2番目の森林率を誇る岐阜県には、森林と人が共生し持続可能な社会づくりを目指す、全国初の森林教育機関「岐阜県立森林文化アカデミー」があります。今月は、アカデミー卒業生で、岐阜県産木材のスプーンや皿、アクセサリを制作・販売する木工作家 長岡かやさんをご紹介します。



スプーン 木工作家 長岡かやさん

「とても良い経験をさせていただき感謝です」

毎日使える木製品を作りたい

「かや」という名は本名だと話すと、ほとんどの方に驚かれます。林業を営んでいた父がつけてくれた名です。姉も木から取った名前なんですよ」

家では質の高い木製家具が使われ、休日は所有する山で自由に遊び回る。木に親しみながら成長した長岡さんは、親戚の木彫家の影響で高校の美術科で彫刻を学びました。

「彫刻も好きでしたが、心のどこかに毎日使える木の日用品をつくりたいという気持ちがありました」

高校卒業後は、森林文化アカデミーの評判を耳にし進学。「木造建築を専攻したので、木工の授業が思いのほか楽しくて。木工作家という



女性に人気 木のアクセサリ

『貼菓子たべよ一博』では貼菓子グッズ木工教室を開いた

事を美味しく感じさせてくれるんです。また、誰がどのように、どんな材料で作ったかを意識する人が増えている今の時代、地域の木を加工して作るシンプルな食器が受け入れられているんだと思います」

木に思い出を、思い出を木に

数年前、木工教室に参加した幼稚園の先生からの相談がきっかけで、小さなお子さんでも簡単に作れるスプーンキットの出張教室を始めたところ、これが評判に。県の『ぎふ木育』の理念と合致し、カリキュラムに取り入れる園や学校が増えています。そして今人気が高まっているのが「メモリアルスプーン」です。



楽しそうにやすりをかけスプーンを作る子どもたち。

思い出の詰まった樹木を木製品に加工して、新たな命を吹き込む。やむを得ず伐採する園庭の木を、園児が使うスプーンに加工できないかという要望に応えたのが始まりでした。

これが口コミで広まり、神社仏閣や個人宅で長年愛されてきた樹木を木製品に加工したいという依頼が徐々に増えています。

「大きな工場が受けないこういった要望にも個別に対応できるのがうちの強みです。木は1本1本に歴史や人の思いがあります。その思いをつなぐお手伝いが出来れば嬉しいです」

木で何か作っている時が一番幸せという長岡さんの手により、間伐材や残材が生まれ変わり、人々に大切に使用されていく。「持続可能な社会」の、ひとつのかたちがあることにあります。